INFORMATION

寺子屋トーク

日本人の死に方大論争

第20回の寺子屋トークは、コモンズフェスタ'99記念トークセッションして開催します。

脳死・臓器移植から戒名・葬儀にまつわる議論まで、戦後50年、日本人の死生観が大きく揺らいでいます。

納得の行く最期をどうしたら迎えられるのか。本格的な長寿社会、私たちの死はこれまでになく長く顔前にあります。人生の終え方をひとりひとりが決める時代、いまこのいのちを充実させるためにも、避けられぬ「終末」について明るくフランクに語り合いましょう。

○ゲスト／大村英昭（大阪大学教授・宗教学・本願寺派僧侶）
神代尚芳（社団法人コミュニティネットワーク協会理事長・医師）
森栗茂一（大阪外国語大学助教授・都市民俗学）
塚村真美（編集者・繁昌花形本舗代表）

○日　時／11月13日（土）13時30分開始（15時30分終了予定）
○会　費／会員500円（一般1000円）

寺町倶楽部協力事業

広がる国際交流の輪 ——JOCSフェスティバル開催さる

9月25日（土）、「こんなんありまっせ」JOCSフェスティバル'99〜アジアの人々と共に〜が、開催されました。

会場にはJOCSの活動紹介ビデオの上映やアジアの手工芸品、チャイ、カレーなどの販売、サリーの着付け、古切手ボランティアのコーナーなどが設置され、約150名の参加者で賑わいました。

本堂では、アジアやアフリカの歌の紹介、アフリカの太鼓ジェンベを使った音楽やダンスや大迫力のゴスペル合唱、歌と踊りにジェンベやディジュリドゥーを混ぜ込んだ多文化音楽、昔懐かしい街頭師の紙芝居などが繰り広げられました。

JOCSは、1961年からアジアに医療者を送る活動を行ってきたNGO。今回は、JOCSプノンペン事務所前代表の塚本氏による赴任地のようすの報告や、そこで感じたことなどの話を通して、参加者と共に日本の海外協力のあり方などについて語り合い、考え合う時間もありました。

楽しいイベントや熱いステージの余韻も覚めやらぬうちに、フェスティバルは幕を閉じ、たくさんの笑顔とあたたかい気持ちをおみやげにそれぞれの帰路に着きました。

「いのちの絵画展」ボランティア募集!!

7頁に記載の「いのちの絵画展」をでは、以下のボランティアを募集しています。

①期間中の会場係
②11月30日午前の搬入作業
③12月9日午前の搬出作業

ボランティアをお願いできる方は、下記までご連絡ください。

TEL 0742−44−6634
李由子（り・よしこ）

※ご連絡は、午後7時〜9時の間でお願いします。

子育て競争にはまっていませんか

塾やお稽古事で忙しい現代の子どもたち。「いい子」にしつけようと、「いい親」を演じる母親たち。

なぜ、「いい子」にしたいのか、なぜ「いい親」でありたいのか。

そこには、他者との比較、他者からの評価でしかわが子の、そして自分の価値を見出せない親たちの姿があります。

アトム共同保育所での実践を通し、子どものありのままを受け入れる子育てとは、親自身も育つ子育てについて、同保育所の所長代理の市原悟子さんにご講演いただきます。

○日　時　11月9日（火）
午前10時〜午後12時
○参加費　1000円
○問い合わせ
関西こども文化協会
TEL 06−6701−9292

【新入会員ご紹介】

（1999年10月26日まで）

8月11日以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【奈良県】
中村　勝胤　北葛城郡
【広島県】
大槻　聖　福山市
会員総数現在181名

サリュ VOL. 16
應典院寺町倶楽部のニューズレター
発行日　1999年10月26日（偶数月発行）
編集人　池野　亮
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543−0076
大阪市天王寺区下寺町1−1−27
TEL06−6771−7641
FAX06−6770−3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

［サリュ］
フランス語で救いの意

1999 OCTOBER
vol. 16



昔、自由と自堕落の違いを何かの本で読んだ。自由とは自分の行動を自分で決めること、自堕落とは自分勝手に都合のよいように行動すること、と書いていたように思う。大人たちは、金銭を得るためだけの労働に追われ、若い人は自由と自堕落をはき違えている。何か大切なものを忘れていないか。

今、それぞれの場で、それぞれの人が、人として生きる"自由"を創造することが必要なのではないだろうか。

新しい教育の姿を求めて……

——平井雷太さん、栗本敦子さん座談会

　應典院の9月は、教育月間ともいうほど、教育関係のさまざまな催しが目白押しでした。

　9月15日には、教育ジャーナリスト・横川和夫さんの寺子屋トーク、9月23日には應典院協賛事業として、映画『見えない学校』の上映会、また9月26日は大阪青年会議所主催の教育シンポジウムが開催されました。

　ここでは、『見えない学校』に出演された教育家の平井雷太さんと地球市民教育センター事務局長の栗本敦子さんに、それぞれの立場から見た教育について対談していただきました。



参加型で学ぶということ

平井「参加型学習というのはどういうものですか?」

栗本「シミュレーションやゲーム、ロールプレイなどの学習活動を使って、その場での気づきを大切にした学び、と考えています。

　私は、参加型学習の『参加』の意味はふたつあると捉えています。

　ひとつは学習のプロセスそのものに受身でなく、主体的に関わること。もうひとつは、そこで感じたり、学んだことを実際の社会に結びつけること。

　参加型とはいっても、学習の場は擬似空間で非日常の世界ですから、いかに社会に参加していくのかということが、とても大切だと思ってます」

平井「参加型学習でも受身にならないですか?　ゲームも与えられるということでは?」

栗本「私も自己矛盾を抱えながら、自問自答しつつ日々やっています。

　地球市民教育センターには教師の参加が多いんですが、真面目な教師ほど『今のままではあかん』という行き詰まり感を持っているんですね。それを打ち破るために、参加型学習という方法がひとつの可能性としてあるという捉え方があります。

　でも、そこで使われている参加というのが、すごくうそ臭い。学習のプロセスに参加しているといいつつ、それが実は単なる操作でしかなかったり。



　じゃあ、ほんとうの参加型学習って何だ?ということを、まさに今、走りながら深めていかなあかんなあ、と思っているわけなんです」

情報の共有化

平井「僕が考えるのは、そういうはっきりしたテーマのある講座では、情報をどうやって手渡すのかが一番大切だということ。

　講座を設定する時には、内部観察者と外部観察者というのがあって、たとえばあるゲームに参加して、『何?　このゲーム、おもしろくなかった』というのは外部観察者。自分がそのゲームの主体者だと思っていたら、決してそんな発言はしない。

　だから講座を設定する準備の段階で、慣れた人だけでやらずに参加する人みんなに一緒に入ってもらう。そうすることで、一人ひとりが自分が場を作っている担い手であると認識するわけです。

　要するに、その場がファシリテーターになっているんです。主催者は場だけを提供する。だから、そこを運営していく人には、受講者と主催者の境界をどうやって取るかが一番の問題ですね」



平井雷太さん

（有）セルフラーニング研究所所長。「教育」を教育する側の立場からでなく、学ぶ側の立場から徹底的に検証し、「教えない教育」を提唱、研究し続けている。「書く」ことを通して学び合う「見えない学校」を日々実践、様々な人たちが彼と共に学び、それぞれの地域で「学びのネットワーク」を広げている。セルフラーニング教材「らくだ教材」開発者。主な著書に、『〜しなさいと言わない教育』、『見えない学校教えない教育』（日本評論社）、『何もしない教育』（博進堂）、『セルフラーニング　どの子にも学力がつく』（新曜社）ほか多数。

栗本「私が普段やっているワークショップの場に来るのは、教師が多いです。そこで感じるのは、先生たちの参加のしかたは、学ぶ主体としての姿ではないということです。これを自分が子どもたちにやったらどうなるか、という視点でしかいない。

　私は、自分がファシリテーターをすることによって参加者から学ぶことがありますね」

平井「そういう場では、終わった後に感想を書くことがある?」

栗本「ふりかえりは書いてもらいますね」

平井「それはファシリテーターも書くの?」

栗本「それが、普段やっているワークショップの場が単発であることが多いのと、ファシリテーターが怠けて書かないということもあって、参加者からは感想をもらうんですが、私からは参加者の方に渡さないですね」

平井「それが一番大事なんです。終わった後に一緒に感想を書いて、その姿を全員に伝えることが、受講者と主催者の壁を取って自分が当事者になるということ。

　自分が参加者になることは、実は自分が一番大変なんだけど、それによって問題意識が変わってくるんです。感想を書くと、言葉では伝わらなかったことが書いたことで伝わる場合もある。

　主催者が参加者意識になれるかどうかっていうのは決定的に違いますね。情報を独占しないで全員にバックすることで、みんなが対等な立場になる。情報の共有化をどうやって図るかが一番のテーマですね」

対等な関係を創るには

栗本「対等な関係を作るのはとても大切だけれど難しいですよね。

　平井さんは、1回の講座の設定の中で、終わった後にそれぞれが感想を書いて、返す時間まで始めから取っているんですか?」

平井「そうです。僕は、文化の中で自己表出というものが一番大事だと思う。だから面倒くさがらずに頻繁に、今考えたことをできるだけ考えずに書く。

　教師だって自己表出ができている人は、本当に少ないと思う」

栗本「それはありますね。でも実際、書くことが面倒くさいというのもありますが、私は書く時にやはりどうしても評価したり分析したりしてしまう」

平井「だから評価しない。主催者がこんなに馬鹿なことを書いているというのを見せるのが大事。すると、何を書いてもいいんだと思うじゃないですか。書くことの抵抗をなくすというのは、情報の共有化の大原則。

　自己表出はコミュニケーションの根本だと思う。だから環境教育を伝えるんじゃなくて、環境教育は素材。そのことで自己表現するチャンスができたと考えれば、ありとあらゆるものが素材になる」

栗本「すべてが素材になるというのは、それはそうだと思いますね。

　参加型学習をやっていると、学校の先生であれ、子どもであれ、前に立っている私が何を期待しているんだろう、というのを考えてコメントする人が、あまりに多いことに気づきます。

　『あなた』がどう感じたかを教えてくださいと言っても、『この人は何を言ったらマルをくれるんだろう』という感覚で意見を言う人が多い。

　まだ、自分が感じたり考えたことを何でも言ってもいいんだと思える場ができていないんだなあ、と感じさせられます」

評価しないということ

栗本「私は、中学高校と周りに適応して過ごしてきて、いやだと感じつつ



も何も考えずに毎日学校に行っていました。

　大学に入ると、毎朝行こうかやめようか考えなきゃいけなくて、自分は6年間問いを持てなかった、ということに気づいて愕然としましたね。その反動が今、出ているようなものですが。

　幸か不幸か、周りから良い評価をもらいつづけてきて、自分もその評価を得ようとしてきてそれでやって来れてしまった。だから、評価しないということがいいなと思いつつ、評価されないということに対してすごく不安があります」

平井「でも、それまでの何も考えてこなかった自分があるということが大事なんじゃないですか。だから気づいた。全然無駄じゃないですよ。



栗本敦子さん

NGOや教育関係者、研究者や国際交流協会の有志によって設立された民間団体「地球市民教育センター」の事務局長。ますます深刻になっていく地球規模の課題に向き合い、解決していける力を持った地球市民の育成を目指す。とくに、参加型学習活動を通して、知識注入型一斉画一型授業が主流になっている教育の現状を変えるための活動を展開している。

始めから気づきっぱなしっていうのも気持ちが悪い（笑）。必要な時に必要なことはちゃんと訪れてくるだろうと思います。

僕なんか、ずっとぼろくそに言われ続けてきたから、なぜそう言われるのかを考えるようになったんです」

栗本「ある意味、誉めることの方が罪深いですよね。けなされた方が考えることが多い。自分のことについて問いをもつ」

平井「ものの良し悪しと意見とは別なんですよ。評価というのは、良いか悪いかです。

たとえば赤入れという行為では、何を言ってもいいわけですが、その人が思っていることは、その人の意見として聞けばいいんです。

自分のことは自分ではわからないし、そうやって自分に対して深く立ち入ってくれる人がいることによって関係ができていくということがあるから、こっちが傷つくようなことを言ってくれる人がどれだけいるかっていうのは大事ですよね」

場を創るには

平井「僕の持っている場は、場づくりをする人の養成を目的にしています。そこに参加した人が、自分もやってみたいなと思って、それぞれのコミュニティで自分の場を持っていくのを援助するのが僕の役割だと思っています。だから全国50ヶ所で今やっています。

場っていうのは、持っている人が一番得をするんですよね。場づくりの快感を味わうとやめられなくなります。中毒性があるから気をつけないと（笑）。



そのプロセスの中で人と人が出会っていく。だから1つの場に集いきってしまうのも危ないですね。人が育っていない証拠です。」

栗本「市民活動やボランティアをやるには自発性が大切だと思います。

でも、すべて自分の責任で私がやらなきゃ、という意識でやっていてはダメだと最近思います。いい意味で他力本願になる。やらなきゃと思って、一人でやればやるほどその場から人が離れて行く。

私なんかは、スタッフとして参加費に見合ったものを提供しなくては、という意識が自らをがんばらせてしまうんですが、ここでまさに参加者と企画者が切り離されてしまうんですね。

参加型に、どちらかだけが楽しいというのはないはずだと思ってるにもかかわらず」

平井「そういう意味では、インタビューゲームは面白いですよ。ペアで片一方は20分間喋りっぱなし、後の20分は交代して聞きっぱなし。そこで喋ったことをどう取るか、どうまとめるかは相手次第。

僕は、インタビューゲームはただの道具で、これが学校教育の中に入ればいいと思っているんです。そうすれば、先生と生徒の関係も変わっていくと思いますね」

栗本「先生が疑問を持たないのが不思議なんです。

たとえ50分でも、授業の中でインタビューゲームのようなものを使ったりして学びの場を持ったその次の時間に、じゃあ教科書を開いて、というような今までと同様の授業をするというのはありえないでしょう?

ワークショップで学んだことを生かすというのは、今まで当たり前だと思っていたことを変えるということだ



よ? と聞きたくなります。私は学校が今のままでいいとは思っていませんから」

平井「今あることを根底から変えられるんだ、ってことが伝えられるワークショップが必要ですね」

育ち合う関係づくり

栗本「目下その当たりを思い悩んでいるんですよ」

平井「難しい。これがすぐにわかったら世話はないね。答えなんてないんだから。

僕の場合は、人に何かを任せる時には全面的に任せるようにしています。たとえ何があろうと絶対に口を出さない。できるだけ、僕のことをあてにするような状況をなくすようにしています。

経験を積んでいれば問題は見えてくるから、それならあえてそれを見ない。ある意味、見捨てると同じで、育てようとしない。

そのかわり、任した相手から尋ねられたら全面的に協力します。本人の要求がない限り僕からの要求は出さない、というのが鉄則です」

栗本「私もいろんな人たちと日々一緒に活動する中でのしんどさが、ちゃんと任せてなかったり、ちゃんと尋ねてなかったりすることにあるのかな、と感じています。

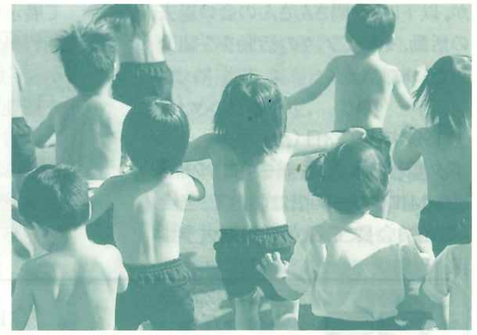
問題を覆い隠そうとすると、深くなる。問題を明らかにすることは大切ですね。

NPOや市民団体が今までと違うオルタナティヴとして活動していくなら、今までと同じやり方ではなく、新しい形の関係の作り方で動いていかなければならないでしょうね」

今後やってみたいこと

栗本「自立という言葉がよく聞かれます。表層的なものではなく本当に自立するには、できないことをできないと言うことであって、私や私の関わってきた多くの団体では、まだその部分が苦手なので、言えるようになりたいですね。

組織の中で事務局に関わっているだけに、とりあえず何とかやっちゃうことよりも、止まれるように。山陽新幹線が、トンネルの壁が落ちてきても営業をやめませんでしたよね。新幹線を止める勇気も時には必要かなと。自分の中にはそれがなかったと思いました。それが本当の強さだなあと。



応典院とはスタートも同じ頃ですし、それぞれがそういう強さを持った、自立した組織に成長していく中で、せっかく近くにあることを生かして一緒に何かできるといいですね」

平井「今『学校をつくる会』というのを立ち上げるところです。新しい学校の中身のイメージを考えるものです。これをすることが、今までやってきたことを伝えるための一番いい方法だと思っています。

これから学校を作ろうとする人には、いくらでもノウハウを提供して協力したいです。おそらくNPOの方向で動くでしょうね。公教育への支援とか、どんな風にも動けてかなり自由なので。

応典院については、こういう空間はとても大事だと思います。寺の機能を取り戻すということは、寺に教育を入れるということ。コミュニティーでの場づくり、場をお寺にすれば、いくらでもあるんです。それから、本当の学びとはこういうものだと知ってしまうと、他が学びでないことがわかる。だから、教育は絶対に後戻りしませんね」

少年犯罪は大人社会の問題…… 第19回寺子屋トーク

去る9月15日敬老の日に、第19回寺子屋トーク「教育・競争から共生へ」が、ゲストに教育ジャーナリストの横川和夫氏、コーディーネーターに和歌山大学生涯教育研究センター長山本健慈氏をお迎えして開催されました。

台風接近のため警報が発令されるほどの悪天候だったにもかかわらず、52名の参加がありました。参加者の大半は女性でしたが、横川氏は、少年犯罪や家庭崩壊などの社会問題と父親の育児参加の関係について説明する中で、本当は男性にこそこのような場に出向いて耳を傾けてほしいと語られました。



横川氏は講演の中で「子どもの抱える問題は子どもの忍耐力の欠如だけではなく、大人社会のゆがみ・ひずみ・矛盾が現れたもの」と指摘されました。そして、その問題を改善するためには、「親の自立が必要」であると主張され、「親が自立するためには豊かな人間関係をつくりあげるサポートシステムが大切」だという事を、現実の事例を交えながらわかりやすく説明してくださいました。

後半は、山本氏も加わって会場の参加者とのディスカッションが行われ、現在子育てをしていたり、子育てが一段落して家庭という視点から教育を見つめている方や、元教師の方たちとの意見の交換が活発に行われました。

予定時間を20分もオーバーしたにもかかわらず、集中した寺子屋トークになりました。

（取材／文　平澤知春）

サポート事業

夕陽さんさん（SunSun）会活動報告

現在の地球は多様な生命に彩られています。しかし、大切な自然環境を、科学の進歩との名のもとに、人間が破壊しようとしています。

「夕陽さんさん（SunSun）の会」は、夕陽をテーマに様々な活動をする市民団体。夕陽をきっかけに、大自然に興味をもっていただき、自然をまもる運動の輪をひろげていければ、と願っています。大阪は、今でもすばらしい夕陽を見ることができる場所が、あちらこちらにあります。夕陽を大阪の名物として、活性化につながる活動を展開していきたいと考えています。

エコノミーからエコロジーへ。みなさんの生活を、少し転換してみませんか。以下に、夕陽さんさんの会の過去の活動、そして近々の活動をご紹介いたします。

◆　◆

①1998年5月23日（土）

『夕陽と日本人』をテーマに、ツイン21・MIDタワー20階において、当会の名誉会長、白鳳女子短期大学学長・山折哲雄先生の講演会を開催いたしました。講演後、ツインタワー展望台にて夕陽を見学、124名のご参加がありました。

②1998年11月28日（土）

天王寺区夕陽丘界隈を散策。新古今和歌集の選者、藤原家隆の五輪塔と天王寺七坂を経て、安居神社、愛染堂から一心寺へ。一心寺にて、ご住職・高口恭行先生の講演『日想感と茶臼山、夕陽丘プロムナード構想について』を開催しました。

③1999年8月

「夕陽」をテーマに絵手紙と一行詩を一般公募、約300点の応募がありました。応募作品は、現在應典院にて展示中です（17日まで）。以降、舞洲野外活動センターで、12月19日から平成12年1月15日まで、大阪中央郵便局で平成12年2月9日から2月24日まで予定しています。

④1999年9月11日（土）・12日（日）

北御堂にて、市民の手づくりの祭典チャリティー&オークション「第2回悠遊博」を、悠遊博実行委員会と共催いたしました。この日にも、絵手紙と一行詩の作品を展示、756名の方にご覧いただきました。

⑤1999年11月13日（土）

「夕陽と大阪城」をテーマに、大阪城天守閣館長の渡辺武氏のご講演を予定しています。講演会前には、大阪城庭園散策、特別展「戦国の女たち」、菊花展などを見学します。

⑥1999年12月31日～2000年1月1日

2000年を向かえるにあたり、1900年代最後の夕陽と、2000年代最初の日の出を体験する集いを企画しています。大阪の新夕陽ヶ丘といわれる舞洲野外活動センターで、世紀的な体験をご一緒にしましょう。

◆　◆

⑤と⑥の活動には、ぜひ多くの方のご参加をお待ちいたしております。

詳しいご案内は、下記まで。

大阪市西区江戸堀1−2−14
（株）かんぽうサービス内
「夕陽さんさんの会」早川
TEL　06−6443−7611
FAX　06−6445−2470

VOICE ボイス

今回のVOICEは、浜田さえこさん。インド舞踊アトリエ「ナーチェ・ナーチェ」を主宰されている浜田さんは、世界最古のインド舞踊のすばらしさを伝えようと、應典院でも週に一度レッスンをされています。インド舞踊を通してみる、應典院という場のもつ雰囲気について聞いてみました。



私が應典院というお寺の存在を初めて知ったのは、應典院が落慶する前なんです。というのも、秋田住職の従兄弟にあたる方と知り合いで、「大阪に変わったお寺ができるよ」ということを聞いていたんです。ですから、落慶したら必ず伺ってみようと決めていました。新聞記事で、應典院が目指している活動を知り、ますます期待が高まりました。

実際に訪れてみると、外観は確かに現代的な建築で、「これがお寺なの?」と思いましたが、一歩中へ足を踏み入れると、お寺独特の雰囲気が漂い、心地よい気持ちに包まれました。本堂は劇場仕様になっていると知っていましたので、「よしここで公演をやろう」と決心しました。

本堂の中で踊っていると、やはり他のホールとは違う、場のもつ宗教的な空気が全身を包み、踊りの持つ意味をいっそう深めてくれるような気がしました。

寺町倶楽部の会員になったのは、去年の1月から。バラエティにとんだおもしろそうな活動をしているな、と思ってはいるんですが、なかなか参加できなくて……。

せっかくユニークな活動を展開されているんだから、もっと世間にアピールをすればいいと思う。そして、もう少し参加やすい仕組みづくりを考えてくれたらベストですね（笑）。

今、毎週木曜日の午後7時から、應典院でレッスンを行っています。男女問わず、子どもから大人まで、初心者大歓迎です。インド舞踊というと、何か難しそうに聞こえますが、ぜひ一度レッスンをのぞいてみてください。

COMMONS FESTA'99　11月4日からスタート!!

「いのち、めぐりあうとき」

寺町倶楽部では、昨年に続いて、来月4日から秋のメイン事業として「コモンズ・フェスタ'99〜いのち、めぐりあうとき」を開催します。

このフェスタは、テーマを共有しながら、様々な分野で活動するNPO（非営利の市民団体）の合同フェスティバル。今回は、「いのち」をテーマに、国際協力や福祉、医療などのNPO10団体が参加します。第8回大阪生涯学習フェスティバル協賛事業。

オープニングは、11月3日のトークライブ「いのちにふれるとき」でスタート。タイのエイズ・ホスピス（エイズの末期患者の看取り）寺院をドキュメントしてきた韓国人写真家・李東恒さんらを招きます（なおプレ企画として、写真展「生きたい」は10月26日から11月3日まで先行して開催します）。これは、すでに若い大学生を中心に、実行委員会が準備に入っており、写真展ともども大きな話題となりそうです。

また、恒例の寺子屋トークは、11月13日の昼間、トークセッション「日本人の死に方大論争」を開催。脳死・臓器移植から介護保険、戒名問題まで、人間の末期に焦点をあてた、本音トークです。ゲストは、宗教学者の大村英昭さん、医師の神代尚芳さんら。「重い話」を、明るくフランクに語り合います。



14日のファイナルは、日本YWCAの金香百合さんを中心に、こどもたちといのちを考えるワークショップを、應典院とその周辺で行います。そのほかにも、話題の映画「えんとこ」の上映あり、お馴染みの竹内敏晴さんの講演ありと盛り沢山の内容です（くわしくは同封のプログラムをご覧ください）。

お寺とNPOが織りなすコモンズ空間。ぜひあなたもご参加ください。

秋田住職発　應典院掲示板

仏教はエイズを救えるか

去る9月6日、アクセス21の代表の高橋卓志さんを招いて、アーユス関西のテーブルトーク「仏教はエイズを救えるか」を開催しました。参加13名。

7月の寺子屋トーク「ノストラダムスをぶっとばせ!」でお馴染みの高橋さんは、信州松本の臨済宗神宮寺の住職さん。このお寺は、市民大学やコンサート、ボランティア活動など知る人ぞ知る「有名寺院」。原発のチェルノブイリからエイズホスピスのタイへと、世界を股に掛ける高橋さんの迫力と話術に引き込まれた2時間となりました。高橋さんの活動は、10月26日からの写真展「生きたい」で、再度ご紹介の予定です。

住都公団の面々、應典院に学ぶ

去る9月9日、上本町周辺地区整備構想検討委員会の方々35名が、大挙して應典院を見学、ぼくのお話を1時間聴いていただきました。



これは、近く上本町で大規模な都市計画が実施されるにつき、その周辺地区を実地に調査しようというもので、何故か應典院がスポットとして選ばれた次第。構成員である住都公団、近鉄、京都大学などの面々に、應典院で展開する「文化・教育と街づくり」についてお話しました。

これがご縁で、12月にはクレオ大阪の「まちづくり」にも出講することが決まりました。

市民プロデューサー塾

この秋は講演ラッシュ。すでに芸術とヘルスケアフォーラム、日本余暇学会、臨済宗青年僧「住職学」を終了。

10月11日には、大阪ボランティア協会主催の「市民プロデューサー塾」に出講しました。これは、教育や福祉、街づくりなど、多彩な市民活動のプロデューサーを養成するための、ユニークな講座で、来春には1冊の本としてまとめられる予定。

「いのちの絵画展」を開催

この絵画展は、死刑囚と呼ばれる人たちが、全国7ヶ所に収監された拘置所内で描いたスケッチや絵画を展示。97年に高松で初めて開催、大きな反響を呼びました。以降、仙台、山形、東京、静岡、浜松、京都、奈良、広島、徳島など、全国25ヶ所で、のべ4万人の方が来場されました。

死刑囚、元死刑囚の作品を通して、死刑囚の存在を感じ、「いのち」とは何かを考えるひとつの機縁になるのではないでしょうか。ぜひ、多くの方のご来場をお待ちしております。入場無料。應典院協力事業。

○期間　12月1日（水）〜8日（水）
毎日11:00〜18:00

トークサロンの予定

お馴染みのトークサロン、最近は前半ゲストのお話、後半をみんなで話し合うスタイルです。誰でも参加できます。ぜひどうぞ。

◎11／17（水）　水曜午後7時〜
※参加無料